

大津百町瓦版

大津・町家・まちなか・いろいろ情報

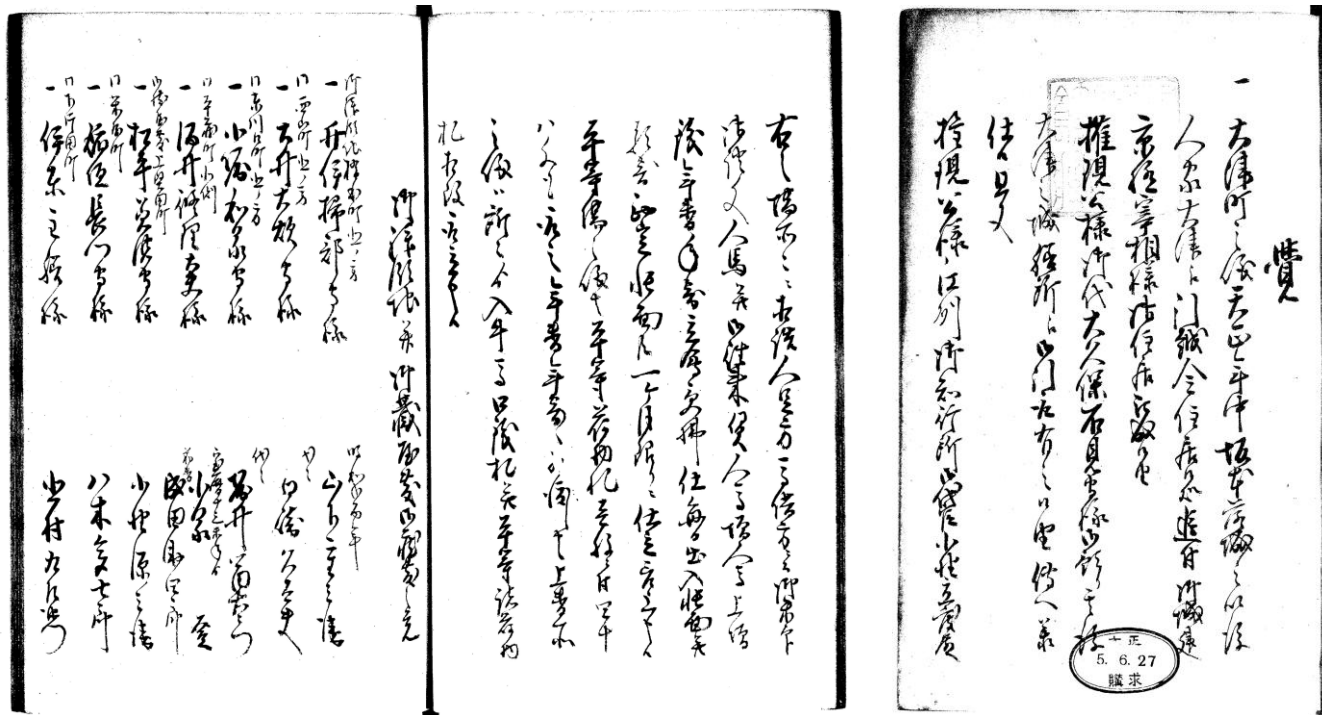
春季号 [No. 29]

2016年 4月

発行 大津の町家を考える会

大津市中央1丁目8-13

TEL・FAX 077-527-3636



『大津町覚』(国立国会図書館蔵)「御拝領地御屋敷御蔵屋敷之覚」部分(右側)

『大津町覚』(国立国会図書館蔵)(冒頭)

江戸時代の大津百町のデータブック

いまから約二〇〇年前、江戸時代の大津百町を知ろうと思
うと、何をひもとけばいいのでしょうか。『新修大津市史』や
『大津百町ガイドブック』などの基本文献はいうまでもあり
ません。しかし、もっと江戸時代の生の大津百町を知りたい、
という方には、『大津町覚』という江戸時代中期に作られた史
料がオススメです。

まず、この史料の冒頭には、天正年中に坂本城が落城し、
人家が大津へ引越して大津城が築城されて、という町の歴
史の始まりから書き起こされます。そして、関ヶ原合戦後の
大津代官による大津町支配、享保七年(一七二二)に京都町
奉行管轄となったことまで書き進められて歴史叙述はそこで
終わり、その後に様々な大津百町のデータが掲載されていま
す。各町名や寺院、人口や職人職種、さらには橋や川などの
情報まで、江戸時代の大津百町がギュッと凝縮されているの
です。また、後段には「御拝領地御屋敷御蔵屋敷之覚」と
いう項目があり、大津百町に年貢収集のための蔵屋敷を置い
た六九もの大名や旗本、寺社や公家などの領主名が書上げら
れています。大津が、大坂・京都と同様に一大米穀の集積地
だったことを示すものです。

さて、この膨大な歴史データである「大津町覚」は、大津
百町の古文書を中心に解読する研究グループ「大津古文書輪
読会」によって平成二六年に小冊子として刊行されました。
非売品ですが、大津市内の図書館等にありまします。大津百町
館や大津市歴史博物館にももちろんあります。原本の写真と
解読文を上下に併記していますし、一部漢文で読みにくいと
ころもあります。ぜひこの機会に、江戸時代の大津百町を
原資料から感じ取ってみたいだけだと思います。

「大津市歴史博物館学芸員 高橋大樹」

『大津祭』が国の重要無形民俗文化財に指定されました。



この度、大津祭が国の重要無形民俗文化財に指定されました。これは文化庁が国指定にふさわしい祭であると評価されたものであり、大津祭の関係者としては、これまで町衆が江戸時代より守ってこられた大津祭の伝承に対して心より感謝申し上げると共に、これほど立派な祭を後世に残さなければならない責任の重さを、今更ながら心に深く感じるものであります。これで大津祭は末永く立派な祭として受け継がれていくことでしょう。

ここに至ったのは曳山連盟の法人化がすべてと言って過言ではありません。もちろん連盟が曳山を所有しているわけでもなく、連盟が国指定になったものでもありませんが、国指定に向かったの環境を整えたことには間違いありません。法人化して多方面からの会員さんの支援を受けるようになりました。理事の構成をみても、過半が大津祭関係者以外の人たちで、大津祭の国指定のきっかけとなったのも、外部の副理事長2名からの働きかけで、この働きかけがなければ今でも国指定にはなっていないと思います。

当初曳山連盟を法人化しようとの考えは、当番町の仕事量が大変大きくなり、このままでは将来当番町になり手がなくなるだろう。なんとか当番町の仕事量を減らせることを考えなければとの単純な発想でした。そうするには事務局の設置が必要となる。その時曳山展示館が指定管理で公募されるとの情報があり、これに乗り遅れたらと法人化を急ぎ、指定管理をいただき、事務局も安定しました。



あとは、毎年開催の大津祭を人的、経済的に支援をすれば、当番町をはじめとする曳山責任者会は曳山巡行に専念できると考えたのです。

ところが、法人化した翌々年の平成18年に大津市で大津まちなか大学大津祭学部が開設され、この卒業生による「長柄衆」が誕生しました。このあたりから、当初目論んでいた目的外のことがどんどん生まれてきました。平成19年には商工会議所青年部と成安造形大学によりイメージキャラクターのちま吉くんが誕生しました。

また、21年には近江を代表する五つのまつり（長浜曳山祭、東近江大夙祭、近江八幡火まつり、日吉山王祭、大津祭）が情報交換の場として近江のまつりフォーラムを立ち上げました。

そして、平成21年10月に国指定について勉強するため三重県の伊賀上野天神祭に研修に行きました。24年度から3か年で大津祭の総合調査をしていただき、国指定へと順調に進み、今年の3月2日に指定証書をいただくに至りました。



曳山連盟が法人化したおかげで、大津祭はここまで来ましたが、私の「祭はまちづくりの原点」にはまだまだほど遠く、大津百町の賑わいは取り戻せていません。この事につきましては連盟設立当初より定款にもうたっていますが、これは簡単なものではありません。

中心市街地活性化協議会ができました。まちづくり大津ができました。百町物語もできました。これからこれらの仲間が一体となって、まちなかの活性化のために取り組んでいかなければならないと思います。曳山連盟も頑張ります。大津の町家を考える会のみなさん、まちづくりの活性化のために色々な分野でのご活動を、今後ともよろしくお願い申し上げます。

※写真は全て曳山連盟の提供です。

【大津曳山連盟理事長 白井 勝好（会員）】

雨森さんから瓦版に原稿の依頼を受けました。私も会員歴は結構古いのですが、大津の町家を考える会に対してはこれといった活動も何もできていなく、罪滅ぼしの気持ちで依頼を受けることにしました。（白井）

琵琶湖疏水がトンネルとなる地点の南側に位置する長等合同宿舍が廃止され、管理する大津財務事務所がその敷地を売却するという。自治体に取得の優先権があるものの、大津市は取得に消極的なことから、一般競争入札で民間に売却されることになりそうである。その敷地はやや不整形なもの 4850 m²とまとまった広さがあり、1969年に建設された4～5階建ての宿舍3棟（共同住宅）が建っている（現在は空き家状態）。

三井寺や琵琶湖疏水の歴史的風土（特別）保存区域に隣接している。民間事業者がマンションを建設することが予測され、この宿舍用地の利用は周囲に大きな影響を与えることになる。こうしたことから、2月20日に「歴まち大津の未来を考える会」の主催により、「リノベーションでまちづくりを考える～大津市中心部の文化遺産と旧長等合同宿舍の活用をめぐる～」と題するフォーラムが開催された。こうした動きをふまえて、この宿舍用地の活用について考えてみたい。

■用地の立地特性と用地に関わる規制

この用地の立地特性と、用地に関わる規制は、以下のとおりである。

- ① 敷地の山側と北側には園城寺と疏水の緑が広がり、落ち着いたある緑豊かな環境が形成されている。
- ② ナカマチ商店街～長等神社～園城寺とつながる観光動線の中間に位置している。琵琶湖疏水の観光船運航が実現すれば、この地域では人の往来が一層増えることが予想される。
- ③ 背後の山の中腹に立地している園城寺の観音堂は、大津市景観計画の重要眺望点になっている。この観音堂の展望台からは大きく広がる琵琶湖や市街地を望むことができる。琵琶湖に向かって右手側は、林立する高層マンションによって琵琶湖を望むことが難しいが、疏水方向の先には琵琶湖が大きく広がり、その雄大な景観は極めて貴重なものとなっている。合同宿舍の敷地はこの琵琶湖を望むちょうど足下に位置している。観音堂からは宿舍のフラットな陸屋根と屋上に設けら



写真 ①は山側から合同宿舍を見る。②はびわ湖側から見た合同宿舍、右側には疏水がある。

れた塔屋をみることができ、現状以上に高い建物が建つことになると、この眺望景観を大きく阻害することになると思われる。

④ 都市計画での用途地域は第一種住居地域（容積率200%、建ぺい率60%）になっている。また、第3種高度地区に指定されており、建築物の高さは20m以下に制限されている。景観計画では「一般市街地景観区」に指定されており、屋根の形状や色彩などについては、周辺の山稜や樹林地などとの調和を図ることとされている。ただし、屋根の形状や色彩に関わる内容については強制力がなく、建築主に協力をお願いする事項である。

■フォーラムでの提案について

リノベーションとは、改修工事によって既存の建物の性能を向上させたり付加価値を与えることにより、建物を使い続けることである。フォーラムでは、各地でリノベーションに取り組んでいる3人の方から、リノベーションの具体的な事例の報告があった。ただ、その多くは木造建築物のリノベーションであったように思う。木造建築物であれば、鉄筋コンクリート造の建築物に比較して改修は容易である。しかし、合同宿舍は鉄筋コンクリート造であり、耐震性は大丈夫なのか。エレベーターが設置されていないが、そうした条件でリノベーションしてどれだけ活用できるのか、などの疑問が残った。

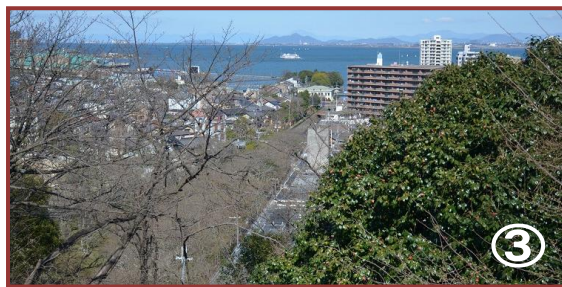


写真 ③は三井寺観音堂から琵琶湖を望む 中央に斜めに見えるのは合同宿舍の陸屋根

リノベーションの今ひとつ重要な側面は、その場所や建築物がもっている記憶（歴史性や文化性）を引き継いでいくことにある。報告者からは「団地スタイルのシンプルでモダンな建物にはファンがいる」といった報告もあったが、そうした価値観や記憶を引き継ぐために、合同宿舍の建物をリノベーションすることに対して、大津市民の賛同を得ることができかどうか。そこには高いハードルがあるように思う。

このフォーラムは、宿舍の建物を有効活用するアイディアを豊かにする、という主旨で開催したとの説明

があった。確かに様々なリノベーションの事例や提案は参考になったが、耐震性やエレベーター設置の必要性の有無とそれに必要な経費など、リノベーションさせるのに必要な経費を踏まえた、もう少し現実的な議論が必要だと感じた。

■宿舎敷地の活用を考える

現状の建物を残してその活用を考えるというのは、現実には難しいのではないだろうか。理想を言えば、大津市が敷地を購入し、観光や交流を中心にした機能を設けて活用していくことである。しかし、現状ではその可能性は低いようであり、民間に売却されることになるかと予測される。



写真 ④観音堂の裏の展望台から琵琶湖を見る 合同宿舎の屋上塔屋が絵馬堂の屋根越しに飛びぬけている。

そうであるならば、より望ましい条件で、この敷地が活用される方策を考えるべきであろう。その方策として、以下の点を提案したい。

① 大津市が敷地全てを購入することが無理であるならば、その一部でも購入する。観光や交流の拠点とし

て、また、琵琶湖疏水観光の出発地点として活用し、中心市街地と三井寺をつなぐ観光動線の魅力を高める。

② 景観に大きな影響を与える建築物の高さについては、第3種高度地区により20mに抑えられるが、それでも現状より高くなり、周囲への影響は大きくなる。とくに観音堂からの琵琶湖の眺望を守るために、高さを現状以下に抑えるとともに、陸屋根ではなく勾配屋根とする。

③ 建物を道路から十分に後退させ（壁面線の位置指定）、その後退した部分を緑化し、周辺の緑と一体になった景観を形成する。また、現状では建物が疏水に沿って平行に立地していることから、疏水側からみると大きな壁ができていている状況にある。こうした建物の配置やデザインについても工夫を加え、周辺への圧迫感を和らげる。

④ ②と③に示したような建築物が建設されるように、この敷地に都市計画の地区計画をかけ、規制・誘導していく。

国有地の売却は国においても大きな課題になっている。国は少しでも高額に売却したいとの意向から、地区計画をかけることに抵抗があるかもしれない。規制が強くなることによって、入札価格が低くなってしまいうからである。しかし、地方には地方、大津には大津の事情がある。この敷地が有する景観的、立地的な重要性をねばり強く説明し、国に納得してもらって、有効な活用が進むことを切に願いたい。

もう一度初心に返って

どうする大津のまち？

「大津の町家を考える会」（以下考える会）は結成当時3年程の間に、大津の町家の歴史や再生、木造住宅の魅力、町家の保存等々に関する講座やシンポジウムを数回行ってきました。

こうした活動の積み重ねのなか、まちなかにはいろいろな活動をしている市民グループがあるが、それぞれ連携がなく単発的な取組をしている現状をなんとかしようとなりました。そこで平成12年7月考える会が主催して「市民フォーラムどうする！大津のまちなか」と題したフォーラムを開催することにしました。この市民フォーラムには大津のまちなかを考えている市民グループ、商店街振興組合、大津市大津商工会議所等々の代表・有志、個人等が明日都会議室一杯の60名近くの方が参加されました。当日の出席参加団体は、木考塾、大津百町衆、六楽会、大津青年会議所、町中のアート展、駅前商店街、ナカマチ商店街、市街地活性化研究会、しなやかシニア等々それぞれから活動報告を聞きました。そしてまちづくり先進地域の京都・西陣、神戸・新開地、長浜から来て頂いた団体の活動報告を受けたあと、フリートークに入りそれぞれ数分の短い時間でしたが20人近い人がまちなかについての思いを語りあいました。そして最後に主催者の竺会長が「日本人は町の景観について鈍感だ自分達で家は作ったが町は作ったことが無いのではないか、市民が集まって自分達の町をこうしたいという話し合いをしたのは今日が初めてではないか？今日を出発点としたい」と締めくくったの閉会となりました。

あれから一六年、一部のところでの活動は少し見えますが状況は殆んど変わっていないような気がしますね。

↑フォーラム翌日の京都新聞には大きく様子が掲載されていました。



病後のリハビリのつもりで始めた散歩。歩いてみると大津に生まれ育った私なのに、知らないことや再発見がいっぱいありました。ここで紹介するのは、出会ったものをブログ風に SNS に書きためたものです。一般公表を前提にしてなかったのも、まったくの独断で憶測や印象だけの話、事実誤認などが多々あると思われますが、間違いがあればご指摘いただければ勉強になります。国重要文化財から、名もなき路傍の石仏まで雑多なものがご笑覧ください。ばさいわい。 会 員 山内 博貴



【長等山阿弥陀坐像板碑—場所 早尾神社】

2012. 11 私のお気に入り念仏スポットである。皇子が丘公園の上の神社参道沿いにひっそりと立つ。鎌倉時代のもので推定されているが、碑文などはなく、何にちなんで建てられたのか全く不明。知られざる路傍の文化財といえる。それゆえ、素朴な信仰心で南無阿弥陀仏と称えることが心地よい。



【志賀の大仏—滋賀里百穴古墳群】

2012. 12 もうひとつのマイ念仏スポットが、この志賀の大仏である。鎌倉時代の作と推定されている石仏阿弥陀如来座像。「志賀越え道」と呼ばれる山道の途中にあり、道中の安全を祈願したものだろう。寺院の管理はなく、有志の講組織で守られている。ここからさらに山道をあ

がっていくと天智天皇時代に建立された崇福寺遺跡がある。



【福王寺古墳群—場所 近江神宮】

2013. 2 近江神宮から西大津バイパスを挟んだ北側に、紀貫之を祭神とする福王子神社がある。その境内に玄室と羨道が露出した福王子古墳群がある。

別段保護養生されてもおらず、説明文らしき掲示もない。古代史ファンでもなければ見過ごされてしまう古墳が大津にはいくつもある。朝鮮系渡来人のかかわりが深い「ドーム型石室」の古墳で、この地を本拠とした渡来系古代豪族は大友氏。近くには平安朝の歌人、大伴(大友)黒主を祀った神社もある。そういえばこの辺りには現在も「大伴さん」がやたら多い。



【切畑古墳—場所 滋賀里】

2013. 6 大津の滋賀里にある桐畑古墳群 1 号墳。往々にして古墳は民間信仰の施設になっていることがある。ここには、頭をかがめながらでないと入れない羨道の奥にドーム状の石室があり、そこに不動明王が安置されている。ここは桐畑さんの所有する山林のようで、その名を冠して古墳を呼称していたんだが、個人名じゃまずいということなのか最近では地名の「熊ヶ谷古墳群」との表記も増えてきた。

石室の天井岩ははずされているが、横穴式古墳としてはきれいに残っていて美しい古墳だと思う。

2013. 4 しばらくぶりで大津市内の遺跡紹介。これは長安寺宝塔(国重要文化財)という鎌倉初期作とされる仏



日本ミツバチが入り込んでいる

【長安寺の牛塔—場所 長安寺 京津線上栄町】

教建造物ですが、地元では「牛塚」と呼ばれています。平安時代に逢坂山にあった大寺院の関寺が、再建されたときの役牛が仏の化身と噂され、その供養に建立されたものとされているからです。国重文なのに保護柵も養生もなく、押せば簡単に倒壊しそうで心配なほどです。子どもの頃このあたりは遊び場の一つでした。そのころ、この宝塔の基部の裏側にニホンミツバチの巣があることを発見しました。40年ほどたった今来てみると同じところにニホンミツバチの巣が！ ちょっと感動です。仏塔マニアしか訪れないと思いますので、ミツバチの存在に気付いている人はほとんどいないでしょう。大津にはこんな場所もあるのです。



【宇佐山城跡—場所比叡山山中越え取り付け道路】

2013.5 本丸の見事な石垣。見とれていたかったが、斜面に積もった落葉に何度も足を滑らせたのですぐに撤退した。森可成が宇佐山城を築いたのは1570年、安土城はこの6年後で当時信長の拠点はまだ美濃岐阜城だった。近江には北に浅井氏、湖西に高島七頭（近江源氏佐々木氏の本流）、湖東に六角親子が割拠していて、信長は点と線で押さえている状態だ。宇佐山城の政治的位置は大きかったのではないだろうか。山頂はこうした城郭に囲まれている。この上にテレビ電波塔が立つ。ちなみに、これができるまで大津市民は関西UHF放送を視聴することができず、名古屋圏のVHFテレビを見ていた。宇佐山城は、近江と京都をショートカットする山中越の道を抑える位置にある。織田信長は物流を重視していたから、ただの軍事拠点としての山城ではなかったのかもしれない。



【新羅三郎墓地—場所 石坂線別所駅】

2013.4 三井寺から北に向かって東海自然歩道の山道がのびている。その途中にこの土まんじゅうがある。これは以前紹介した河内源氏の源頼義の、三男である源新羅三郎義光の墓である。源義光は後三年の役で奥州において活躍したのち、近江に領地を有し、三井寺の山内でもあるこの地に葬られた。義光は甲斐の武田氏や常陸の佐竹氏の始祖でもある。山道なので普段靴ではかなり歩きにくい場所だが、昇り降りの少ない道なのでウォーキングシューズでの散歩コースにはちょうどいい。市役所の裏山なので、街の喧騒もすぐ近くに聞こえてくるほどだが、人と出会ったことはまだ一度もない。



【馬頭観音—場所 志賀越え】

2015.1 以前紹介した志賀越えの磨崖三尊仏の少し先には、馬頭観音の標識が出ている。それにそって山道を歩いていくと、やがて下り坂になりその先に馬頭観音の石像が現れた。風化してその形相こそははっきりしないが、三面八臂の馬頭観音像だ。普段はやさしい顔の観音様だが、馬頭観音は明王のように怒りの形相をしている。心の邪悪を蹴散らす、懲悪の慈悲を示しているのだという。一方で頭上に馬の頭をつけていることから、近世には畜生道救済や行路安全の祈願のために路傍に建てられた。志賀越えは平安時代から京都への重要な交通路だったことを考えると、この馬頭観音も交通守護のためのものであろうと推察される。

編集後記

またまた記事がなく4ページに思っていました。会員の助けで何時も通りの6ページになりました。大津祭の国の重要無形民俗文化財指定についての記事、長等合同宿舎問題に触れる記事、日項目にしない大津の文化財について等々内容の濃い瓦版になりました。 [K. A]